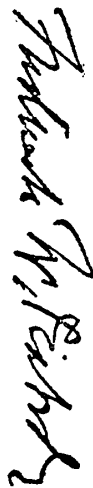


「弁護士ピーボディー」について

——有島武郎を見るために——

栗田 廣美



ピーボディーのサイン（『名誉』かドルか』より）

一

一九〇五（明38）年一月、アメリカ滞在中の有島武郎は、弁護士ピーボディー Peabody の家に住みこんだ。有島は当時二十六歳、渡米後二年目、ハーバード大学大学院に在籍して四か月余を経た時点のことである。

次の一節は『ホイットマンの一断面』中の有名な部分だが、傍点を付したように、この「弁護士ピーボディー」の姿はなかなか魅力的である。

その当時私は、紐育市生れの、放埒な、然し美しい靈魂を持

つた一人の弁護士と共同生活を営んでゐたが、学校の講堂から夕暮に送られて帰る私は、ポストンから塵をかぶつて戻つて来るその人と、夕食後ランプを距てて坐るのを樂しみとした。彼れは必ず書架から草色の一冊を抜き出して、張りのある感傷的な声を押へつけるやうにして、かの詩この詩と——エマーソンがカアライルに「訳の解ない怪物 (nondiscript monster)」と云ひ送つた——ホイットマンの作物を朗誦した。（中略）それ等は読む中に読者を涙ぐまし、私を涙ぐました。弁護士が涕をかむ時にのみ歌は杜切れた。読誦が終ると二人は何時でも新しい感激に満されて心から感心しながら互に顔を見合はせるのだつた。

（傍点栗田・以下同様）

ハーバードの学友・金子喜一の紹介で、有島が、妻子と別居中の中年弁護士・ピーボディーを知ったこと、食事などの世話をするかわりに家賃は無料という約束で、彼の家に住みこんだこと等は、周知のとおりである。——こうして有島の回想は、『草の葉』入手の

場面へと続いて行く。

私はボストンの町を詩集「草の葉」を尋ねて歩いた時の事を今でも思ひ出す。本屋の番頭はホイットマンの名を聞くと、パリサイ人の様な顔をして、そんな本は持ち合はさないと云つた——さう云ふ事が本屋としての誇りでゝもあるやうに。(後略)

『ホイットマンの一断面』

この一節(正確には、初出形『ワルト、ホイットマンの一断面』の対応箇所)は、「有島とホイットマンとの邂逅を考えようとする人には必ず引照される⁽¹⁾」ものである。

書店の番頭に「不浄物」扱いされていた詩集を、夕食後のランプのもとで、涙しながら読む者と、聞く者。——この図は確かに、有島のホイットマン受容史上のハイライトたりえよう。

我々は、鈴木鎮平氏が指摘する⁽²⁾ように、有島とホイットマンとの出会いが、単なる「読書」ではなく、「聴覚的、ホイットマン享受という、恐らく無上に正当な方法」によるものであった事、しかも、それが「人間味豊かな一アメリカ人」(同氏)との、出会いの中の出来事だったことに注目したい。そして、ホイットマンとの邂逅を有島が描く時、ピーボディーの姿が、必ず、生き生きとスケッチされることにも注目したい。

森山重雄氏は、「有島の評論などを読むと、言葉が過剰でブッキッシュな感じがするが、その本質は生そのものとの触れあいにある」。「有島の精神の原点」は「究極的には、宗教や思想や芸術から

与えられたものではなく、ある具体的な人間との出会いによる」と述べている⁽³⁾。——ピーボディーはまさに、その、重要な一人であった。

——ハーバード時代(時代的には、旅順陥落前後の日露戦争後半期にあたる)に、有島は、大きな精神的危機を迎えていた。自ら「生れた当時のやうな渾沌とした心の状態になつてゐた」(前掲書)と回想するその危機に際して、ピーボディーは(ホイットマンを伴った姿で)、有島の「精神の原点」に触れた「具体的な人間」だったのである。だからこそピーボディーは、前掲書や『リビングストン伝・第四版序言』に直接描出されたのみならず、欧米での青春に題材を得た唯一の長編『迷路』に、(社会主義者・金子喜一ともども)その内面化・虚構化された姿を見せるのである。

「弁護士ピーボディー」とは何者か、という問題は、従って、有島の在米時代における精神世界を考える上で、かなりの重要性をもつだろう。むろん、彼については、ホイットマン受容とのかかわりで屢々語られてきた。しかし、語られることの内容(事実としての情報)は結局、有島自身の回想に帰着するものがほとんどであり、研究史上、一種の膠着状況にあったように思われる。——そこで、本稿では、『有島・在米時代研究』の基礎的な一環として、この「弁護士ピーボディー」についてのいくつかの新資料を紹介しつつ、新たな人物像に接近したいと考えている。

紹介する資料は、左記の諸点にかかわるもので、どれも一九八五

年度に、ハーバード大学等で収集したものである。

○ 略歴、住居等に関する資料。

○ 宗教団体「キリスト教科学」(クリスチャン・サイエンス、エディズム)を、かなり戦闘的に批判する、ピーボディー自身の著作物(有島と出会う時期のものを含む)。

○ 第一次大戦後の戦債問題に関するアメリカの政策を批判する、ピーボディー自身の著作物。

これらの資料から、今とりあえず言えることは、この「弁護士ピーボディー」が(従来の、どちらかと言えば、市井の、風変わりな弁護士といったイメージとは違って)、ある程度の数の著書を持ち、社会的・政治的問題にも独自の立場から積極的にかかわった、一種の社会活動家、「戦闘的ヒューマニスト」とも言える人物だったという事である。この事は、有島の在米期への一照明たり得よう。

ここでは、資料のすべてを紹介することは不可能なので、著書についてはおおよその紹介にとどめ、とりあえず、《ピーボディー略年譜》の作成を中心に、履歴や住居等、彼の人物像の輪郭を明らかにしたい(他日再論を試みて、不足・不備は補いたい)。

なお調査に当たっては、小玉晃一氏はじめ先学諸氏に多大な御教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。

二

ピーボディーの履歴については、まず、カナダで出版された《A Dictionary of North American Authors》⁽⁴⁾(一九五一年版)に、次のような簡単な記述があり、彼のフルネームが「フレデリック・ウィリアム・ピーボディー」だったこと、一八六二年にホイットマンゆかりの地・ブルックリン(ニューヨーク)で生まれ、一九三八年、ニューヨーク市に没していることがわかる(この人物が、有島とかかわったピーボディーであることは、後掲の諸資料から確認できる)。

Peabody, Frederick William, lawyer, b. Brooklyn, N. Y., 1862; d. New York, N. Y., Aug. 15, 1938. [10]

本文末の記号[10]は、当該人物に関する他の記事の所在を示しているが、指示されたA. N. Marquis版の《Who Was Who》⁽⁵⁾(一九四三年版)には、「著述家・弁護士」ピーボディーについての、かなり詳しい記載があった。これをもとにすると、《ピーボディー略年譜》の基礎的な骨格だけ是可以するのだが、それは後に譲り、まず、本文を掲げよう。邦訳は第六節《略年譜》中の記述にかえる(なお没年は記されていない。ややミスも見えるが適宜訂正する)。

PEABODY, Frederick William, author, lawyer; b. Brooklyn, N. Y., June 6, 1862; s. of Enoch Wood and Cornelia (Marshall) P.; student Poly. and Collegiate Inst., Brooklyn, and Columbia; LL. B., cum laude, Columbia Law Sch., 1888; m. Anna G. May, Sept. 21, 1893; children—Mary

May (Mrs. J. Leslie Hotson), Helen Peabody; m. 2d, Frances R. Bliss, of Halifax, N. S., Mar. 17, 1910; children—Richard, Alexander. Admitted to N. Y. bar, 1888, and began practice as mem. Peabody, Baker & Peabody, N. Y. City; retired 1912. Served as counsel for sons of Mary Baker Eddy in suit against Mrs. Eddy. Founder, 1927, and mng. director Am. Assn. Favoring Reconsideration of the War Debts. Author: *The Religio-Medical Masquerade*, 1912. Coauthor: (with Prof. Woodbridge Riley and Charles E. Humiston, M. D.) *The Faith, the Falsity and the Failure of Christian Science*, 1926. Home: Ashburham, Mass. Deceased.

この記述には、ピーボディーの著書が(共著も含め)二編しか記録されていない。しかし実際には、少なくとも以下七編の著書が有ることがハーバード大学 Pusey 図書館で確認できた(題名は一部、抄訳とした。原題や書誌的事項は、〔補〕参照)。

《ピーボディー著作物一覧》

- (一) 『エディズムあるいはキリスト教科学の完全な暴露——メアリー・ベーカー・G・エディーに関する、平明な言葉による平明な真実』ボストン、一九〇一、一九〇六等。
- (二) 『宗教的・医学的仮面舞踏会——キリスト教科学の完全な暴露』ボストン、一九一〇、一九一三。

(三) 『キリスト教科学の信仰、あるいは虚偽、あるいは失敗』(Woodbridge Riley, Charles E. Humiston との共著) 一九二六。

(四) 『アメリカ、めつめつー めつめつ!!』一九二六。

(五) 『公署』カレンカ——旧連合国に対するアメリカの道義的責務に関する、批判的検討』(Frederik E. Cow との共著) ロンドン、一九二七。

(六) 『戦友に対する公正なやり方』アシンバーナム(マサチューセツ)、『一九二七。

(七) 『首相たちから、大統領へ』同、一九二八。

〔補〕

(一) *Complete Exposure of Eddyism or Christian Science. The Plain Truth in Plain Terms Regarding Mary Baker G. Eddy.* (Third, Enlarged Edition). N. O. T. by Frederick W. Peabody of the Boston Bar. 一九二〇の本(第三版)がハーバード大学に現存するが出版社等不明、しかるに扉に Copyright, 1904/Copies of this pamphlet may be procured of the author, No. 10 Tremont St., Boston, Mass. とある。本文から初版が一九〇一年、この第三版が一九〇六年十二月以後と分かる。本文(以下同様)五三頁。

(二) *The Religio-Medical Masquerade, A Complete Exposure of Christian Science.* 著者肩書は同前、キムトン・The Hancock Press 刊、前掲『Who Was Who』には一九二二年刊とあるが、前記ハーバード大学 Pusey 図書館所蔵本には Copyright 1910 とある。一九二七頁。

(三) 前掲『Who Was Who』にも(原題も)が未見。

(四) 表紙には次の様に書かれている(以下同様): *America, Awake! Awake!!/ You Are Being Sold Betrayed Dishonored/ Your Grate Dead Demand Your Vindication/ Your Unborn Must Not Be Shamed/ "Once to every man and nation comes a*

moment to decide, In the strife truth with falsehood, for the good or evil side." / That Moment For You, America, Is Now. 1926. 発行所不明。大統領宛の手紙形式。一七頁。同年(一九二六)四月(六、七、八、九月)重版。

⑤ Peabody, Frederick W. and Cow, Frederick E. "Honour" Or Dollars. A Critical Examination of the Moral Obligations of America To Her Former Allies by An American Frederick W. Peabody, Ashburnham, Massachusetts. U. S. A. And An Englishman Frederick E. Cow, Twickenham, Middlesex, England. London: Simpkin, Marshall, Hamilton, Kent And Company, Limited, 1927. 一〇四頁。

⑥ A Square Deal to Our War Partners/ Speech of Frederick W. Peabody, Esq., of Ashburnham, Mass. / Before the Institute of Politics at Williamstown, Mass., in August 1927. / Printed and distributed by The American Association Favoring Reconsideration of the War Debts, Ashburnham, Mass. 1927. 六頁。

⑦ The Prime Ministers to the President by Frederick W. Peabody, "For Justice, all place a Temple and all seasons summer." November 11, 1928. 一八頁。発行所不明。⑤に同く。

このように、ピーボディーの著作は、第一に、アメリカの宗教団体「キリスト教科学」に対する、執拗で戦闘的な批判書(一―三)、第二に、第一次大戦中の連合国に対する、戦後のアメリカによる戦債取り立てへの、これも戦闘的な批判キャンペーン(四―七)の二種類に分けることができる。前述のように、ここには「戦闘的ヒューマニスト」ピーボディーの姿が見えるのだが、次節以後、そのあ

らましを見て行きたい。

三

ピーボディーの著書中(一―三)は、「キリスト教科学」に対する批判の書であった。

これらの著書が発行されたのは、一九〇一年から一九二六年までの期間、つまりピーボディーの三十歳代末から六十歳代半ばにかけてのことである。また、前掲の《Who Was Who》には、彼が、「キリスト教科学」に対抗する訴訟の弁護士を務めたという記事もあり、ピーボディーにとって「キリスト教科学」批判は、一種のライフ・ワークだったとも言えよう。

「キリスト教科学」(Christian Science Association/ Church of Christ, Scientist) は、メアリー・ベーカー・エディ夫人 (Mary Baker Eddy, 1821~1910) によって、一八七六年に設立された宗教団体であり、「催眠術師クウィンビーの治療で精神的・肉体的な病気が治癒したと信じた夫人が、イエス・キリストの病氣治療の方法を再発見したと考えた」のに始まる。そして精神こそが唯一の実在であり、「物質は幻想であって、苦難・病氣は物質の実在性を信じる誤った思想からくると説く^⑧」ものとされている。

生駒孝彰氏(『アメリカ生れのキリスト教』)によれば、この教団の出現した十九世紀後半は、「それ以前に誕生した新宗教とは異なる

った、アメリカ独自のキリスト教が出現してきた」時代であった。その代表として、氏は、「モルモン教」「エホバの証人」とともに、この「キリスト教科学」を論じている。その勢力は、エディ夫人が死んだ一九一〇年には、「十万余の会員と千二百以上の教会を有するまでに発展して」いたということである。⁽⁷⁾一九〇五年頃の——即ち、F・W・ピーボディーが、この「キリスト教科学」に対する、戦闘的で執拗な批判活動を続けつつ、有島と共同生活をしていた時期の——この教団の勢力は判らない。しかし、当時もボストンに、五千人を収容する巨大なドームの堂を建築中という大組織だったことは確かである。

今、この教団の教義等に深入りする必要は、むろん無かる。ただ一点、『カトリック大辞典』が、ある意味で「キリスト教科学」の原点であった病氣治癒を、「容易に正しい医療の道が放置されるため危険なるものと言わざるを得ない」⁽⁸⁾と批判しているのは、重要である。——ピーボディーの批判活動の原点も、また、この「病氣治癒」の危険性にあったようだ。

現在確認できる限り、ピーボディーは既に一九〇一年、ボストンで「キリスト教科学」を批判する講演をし、パンフレットを発行している（著書一の初版）。その中心的なモチーフが、この「病氣治癒」の危険性を放置できないという「正義感」であったことは、彼の著書からも読み取ることができる。

現在のところ、ピーボディーが「キリスト教科学」に関心を抱い

た直接的な理由は不明だ。が、一般的には、「キリスト教科学」が、彼の住んだボストン周辺地域を拠点とする、いわば、（当時注目を集めた）地元最大の新興の宗教団体だった事は背景の一つだろう。

また、例えば、エディ夫人の開いた「マサチューセッツ形而上専門学校」（ボストン）で「霊的癒し」の教えを受けた生徒が、十九世紀末の七年間で数千人にのぼると言う事からも、⁽⁹⁾「正しい医療の道が放置され」た事による病人の「被害」があったとすれば、この地域に集中していた可能性があり、貧しい者からは「費用もとらずに」⁽¹⁰⁾「自分の家に逗留させて」訴訟の世話をしたという弁護士・ピーボディーの耳に、多くの「悲惨な」事例が入った事も十分想像できる。

病む子を前に、「病氣は存在しない」と心にくり返しながら、医学的治療も受けさせずに死に至らしめた母親たちが多かった——と、ピーボディーは言うのだが、彼の著書は、こうした事柄に対する熱い、ヒューマンな思いに満ちた、激しい怒りの書となっている。

今ここで、彼の全著書を概観することはできないので、最初の著書『エディズムあるいはキリスト教科学の完全な暴露』第三増訂版の序言に当たる部分を抄訳したい。この部分だけでも、ピーボディーの口調というか、一種の「人柄」は、ある程度うかがえるだろう。

私はメアリー・ベーカー・G・エディ夫人とは、全く、個人的な知り合いではない。私は彼女に会った事もないし、文通をした事もない。私は、エディ夫人が個人的には、直接的にも間接的にも、私の利害や生活に何等かの方法で、何等かの影響を与えたり、与えようとしたとは、思っていない。私は、私のこれから述べる事が、些かなりとも個人的な感情故ではないのだ、という事をはっきりと示すために、まず最初に、こういう個人的な陳述をしておく事が適当だと考える。

私は、これから考えようとする問題について、深い感情を持っていないなどと装う事はできない。私は、私が強烈な感情を持っている事を、認めさせよう。しかし、私のそういう感情は、キリスト教科学なるものの偽りの発見者にして創始者である、このエディ夫人の、家庭生活及び宗教生活に対する有害な影響について、明瞭に知的に認識しているが故の感情なのである。(中略)

キリスト教科学が、ごまかしであり欺瞞でありペテンであるという事、それも、あらゆる時代を通して最大のごまかしであり、詐欺であり、ペテンであるという事を、私は確信していると言言したが、この事は、当然、キリスト教科学の創始者であり、その宗派の指導者であり組織者であるメアリー

・ベーカー・G・エディが、人類を迷わし、欺き、騙し取ったイカサマ師達の中でも、その厚かましき、不遜さ、貪欲さすべての規模で、一人抜きん出て際立った人間だという事をも、また、私は確信しているという事である。

女性に対してこのような事を公然と言うのは、男性にとって愉快な事ではない。しかし、女性である事すら無視せざるを得ない状況というものがあり、そして、この場合もその一つなのである。

さてメアリー・ベーカー・G・エディとは何者か。第一に、彼女は女性で、八十三歳で、体の弱々しい人物である。こういう状況を考えれば、もしも彼女が個人的な生活をしているのなら、些かなりとも男らしい感情のある男なら、たとえ彼女がどんな性格の人物で、どんな生活をしていようと、公然たる糾弾をしようなどとは、決してしないだろう。しかしエディ夫人は、個人的な生活をしているのではない。彼女は公的な人物である。彼女は、現代の世界で最も目立つた、ある点では、最も影響力を持った女性の一人なのである。(中略)

エディ夫人の影響は限りなく有害である。それは文字どおり、何千何万という人々の理性を無くしている。それは無慈悲に夫と妻を引き裂き、親と子を引き裂いている。それは、何千何万という無数の人達を知識の追及から引き離し、中世

の迷信に没頭させている。(中略)

しかし、全くのナンセンスか或いは悪魔の仕業たる・この怪しげな科学の、そして、その創始者に関する限り・不遜さと偽善の典型である・この偽りのキリスト教の、そして、この途方もない詐欺師の人生と仕事のすべての邪悪な結果の、それらすべての有害な影響の中でも、われと我が身をどうすることも出来ぬ子供達の、救われぬ苦しみこそ、最悪のものである。

神は、全き真実として、病氣・痛み・そして苦しみというものが・本当には・存在していないのだと、エディ夫人に啓示したと、彼女は教え、信奉者たちは信じている。そして、この信仰にしっかりと心を捕らえられ、子供達の苦痛を楽にするほんの少しの努力もせずに、子供は病氣ではあり得ない、苦しがつているはずもない、なぜなら、病氣とか苦痛は実際には存在しないのだから、という狂った考えを、いつまでも何度もうくり返し、くり返し、抱きながら、自分の子供達を苦しからせておく、そういう母親が多くいるのである。一方、病氣は実際にあるし、苦痛も実際にあり、そして、苦痛を和らげるためのほんの少しの手当もされずに、長びかされた苦痛の後で、子供は死ぬのである。もしも、成人が、賢さよりも愚かさを好むなら、また、生命よりも自殺を好むなら、その人は、自分の好みを楽しんで良いだろう。しかし、

いかなる男も女も、その動機や関係がどうであれ、子供が苦しみ死んで行くのを、黙って傍観し、放置しておく権利は無いのだ。「これら小さき者の一人を害するような者は誰でも、その首に、引き臼の石を下げて海の中に投げ込んだ方がよい」。そして、私の反対と抗議が有効である限り、どんな男も女も、邪悪な女の邪悪な教えを、——彼女の残酷な詐欺、そして彼女の殺人的な嘘を——狂気のごとく信じる事によっておこる故意の怠慢で、幼い子供達を殺すことは、許されないであろう。(後略)

これ以後、ピーボディーは、エディ夫人の「自己中心的」性格と経歴を書き続け、「キリスト教科学」批判に入っていく。

その中でも特に力を入れているのは、エディ夫人の主著で「キリスト教科学」の聖典とされる『科学と健康』が、クウィンビーからの借り物だとする箇所であろう。この「借り物説」は、「キリスト教科学」をめぐる長い間争われた事らしく、生駒氏の前掲書に詳しい。同書にはピーボディーに関する言及はないが、彼はこの論争にも早い時期から関係した人物だったのである。

四

ピーボディーの著書中(四)以後は、第一次大戦後の戦債処理問

題に関するものであり、発行された時期は一九二六年以後の三年間に集中している。有島と出会った時から、ずっと後の事でもあり、極く簡単に触れるにとどめるが、ここでもやはり、老いを見せぬ戦闘的ヒューマニスト・ピーボディーの面目を見る事ができる。

第一次大戦の連合国に対するアメリカの貸付け金は、巨大な額に達したが、これについて英仏等「主要債務国の政府は、共通の戦いに対する米国の分担として、帳消しにされるべきだ」⁽¹¹⁾と考へ、特にイギリスには「帳消し論」が強かつたとされる。アメリカは強硬な取り立て姿勢を堅持していたが、これに対し、ピーボディーは、後掲の文章にも明瞭なように、「アメリカはシャイロックか」と厳しい批判をくりかえしたのである。そして、戦債問題の再考を求める《American Association Favoring Reconsideration of the War Debts》という組織を指導し、前掲のようなパンフレットを発行した。

今回の調査では、前掲の著書のほか、Wildon Lloyd 著の《The European War Debts and Their Settlement》⁽¹²⁾に、ピーボディーのクリーッジ大統領宛書簡（一九二六年）の引用等があることも確認でき、彼の活動は、ある程度の社会的影響力を持ったとも考えられる。

ここでは、この問題唯一の本格的著書『名譽』かドルか』の冒頭を抄訳する。これはイギリス人 Frederick E. Cow との共著で、ロンドンで発行され、「著名なニューイングランドの弁護士、フレ

デリック・ピーボディー氏は、アメリカで発展している、合衆国の対連合国貸付け完全帳消し運動の、指導者である」と紹介されている。（ピーボディーの執筆部分。傍点は、原文イタリック）

もしもアメリカが、フランスかイギリスだったら

乞食に物を与える想像力ある人は、自分自身に与えているのだ、と言われている。それはつまり、彼が乞食の立場に立つ事、その希望の無さや零落を感じる事、その荒廃した生活を実感するという事である。想像力のある人のみが、公正な精神の持ち主でありうる。何故なら、そういう人のみが、他者の立場を理解できるのだから。

少しの間、想像の中で、フランスやイギリスと立場を取り替え、その見地から、この戦債問題を見てみよう。そうすれば、我々は、自分自身を、彼らが見るように見る事ができるだろう。

一九一四年の八月、ドイツが、フランスを襲撃したようにアメリカを襲撃し、我が大西洋岸の大きな諸都市を滅亡に至らしめ、四年以上にわたる無慈悲な戦争の中で百五十万のアメリカ人を殺し、三百万人を傷つけ、国を不毛にした——ドイツは事実フランスに対し、そうしたのだ——と想像したまえ。

そして、その間、アメリカの生死をかけた戦いの最初の二年半の間、フランスからは同情の一言も無く、フランスがその期間「思考においてすら中立」を保ちつつ、途方も無い値段でアメリカの軍需物資を供給して法外に富んで行ったと、想像して見たまえ。(中略)

そして、我々は仲間と共に、最後に勝利したが、それは、フランスが死者五万・負傷者二十万だけであつたのに対し、我が国は百五十万の死者と三百万の負傷者という犠牲のもと(フランスは事実、この犠牲を払った)何十億という財産を破壊され、巨大な負債を負つてのものであつたという事を、また、我々を貧困にした苦闘が終わつた時、フランスは以前より富んでいたという事を、想像したまえ。

そして、さあ想像して見たまえ。戦後数年たつて清算の日になり、世界一富裕な国たるフランスが、殆ど破産同様のアメリカに、フランス自身の安全と防衛のために前貸した約三五億ドルにのぼるすべてのドルの返済を要求し、そしてアメリカが即金でその金を支払えないからと、遅延金として更に三五億ドルをも要求するという事を。

想像された情況の中で(それは裏返しにされた現実の情況だが)、アメリカはフランスの事をどう考えるだろうか。アメリカはフランスを、自らの肉一ポンドを要求する冷酷なシヤイロツクだと弾劾しないだろうか。(中略)

そしてもし、想像された情況の中で、想像上のフランスによる厳しい取り立てを、弾劾しないアメリカ人など一人もないのなら、物を知っているアメリカ人のいったい誰が、(想像ではフランスになっていた)アメリカ自身による現実の厳しい取り立てを、いったいどうして是認できるだろうか。

否、アメリカの人々が、政府をして考え直させない等という事は、考えられない事だ。彼らは事実を知らされていなかったのだ。(中略)私の大統領宛の手紙は、事実をすべての人々に知らしめようとするものであつた。そして我々は、すべての人々が事実を知る時まで、事実を知らせ続けるだろう。そして、その時になったら、イギリス、フランス、ベルギー、そしてイタリアは、知るであろう。本当のアメリカは、思いやりがあり、公正で、そして、この間の戦争の仲間たちに対する、世界の富のすべてでも支払う事の出来ない恩義を、はっきりとわきまえて感謝しているのだという事を。

五

もう一点、残る紙幅で報告しておきたい事がある。それは、有島が同居していたころの、「ピーボディーの家」の事だ。

有島の日記等には、住所・124 Oxford Street とある（稿末地図参照）。ハーバード大学の中心部から、徒歩十五分程の現地に実際に行ってみると、そこには、かなり大きな、古い造りのアパート【写真A】があった。しかし、これは、従来知られていた二階建ての独立家屋とは違っている。——この「ピーボディーの家」は、有島の精神上重要なハーバード時代の、『迷路』にも作品化された時期の）舞台でもあるので、やや詳しく調べることにした。

現在の地図と、当時の地図を対照して見ると、このあたりの町並みは、ほぼ昔のままであることがわかる。そこで、ケンブリッジ市立図書館蔵《Cambridge Directory》（住所録）の、一九〇四、一九〇五、一九〇六年版を見ると、次のようなことが判った。

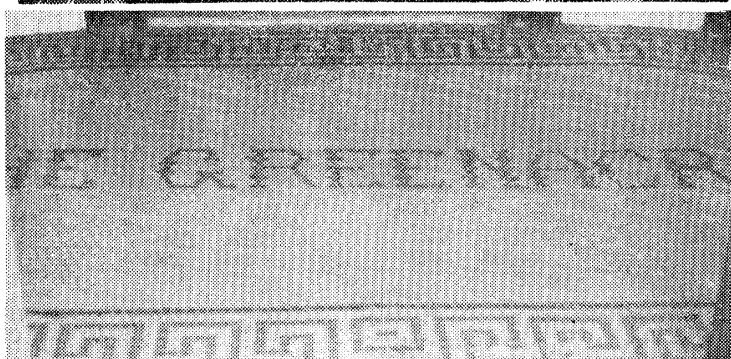
まず、一九〇五年版の住所録・オックスフォード街一二四番地の欄には、確かに《Frederick W Peabody lawyer¹⁾》の記載があり、有島の日記等の記述が再確認される。（また、同住所録を逆に人名欄から調べても同じことで、——つまり、同姓同名の人物は同市にはいない。また、このことと、後掲年譜記載事項から、第一節以来述べて来た人物が、有島と同居した他ならぬ「弁護士ピーボディー」だった事も確認出来る）

しかし、ピーボディーの名が記されたこの一二四番地には、合計十一件の記載があり、しかも、その最後のものは「ザ・グリーンエーカー」《The Greenacre》というアパート名を示していて、つまり、ここは、ピーボディーのほか九世帯が住んでいたアパートだっ

たということがわかる。また、この《The Greenacre》という名前のタイル文字が、現在でもアパートの玄関に残されており【写真B】。（更に、一九八五年当時このアパートを修理中だった業者の言葉でも、この建物は随分古いとのこと）有島が同居したピーボディーの「家」が、従来知られていた一戸建てのものではなく、この、現在も残るアパート《The Greenacre》（「みどり野荘」とで

上【写真A】

下【写真B】



も誤すか)であったことは確定的と言えるだろう。

ところで、その前年、一九〇四年版・同市住所録の、オックスフォード街一二四番地の欄には、「ザ・グリーンエーカー」には九世帯が住んでいたが)ピーボディーの名は無い。また逆に、この翌年、一九〇六年版の同じものにも、八世帯住んでいたがピーボディーの名は無い(氏名から逆引きしても同様)。つまり、ピーボディーが、ケンブリッジのここに住んでいたのは、一九〇五年版がカバーした時期のみという事である。

つまり、ピーボディーは、おそらく、有島と「共同生活」をする直前に、「ザ・グリーンエーカー」に来て、有島と別れた直後に、どこかへと去ったのである(推測を逞しくすれば、この時期はほぼ一致するということも有り得る。ピーボディーがケンブリッジに住む以前に、金子とボストンで知り合っていたことは、両者の活動範囲から、十分有り得る事だし、有島がケンブリッジからニュー・ハンプシャーに移って仕事を求めたことも、あるいは、ピーボディーのケンブリッジ退去と関係するかも知れない)。

※なお、ケンブリッジに来る以前のピーボディーの住居は、ボストン市立図書館所蔵《City Directory of Boston》⁽¹⁵⁾一九〇四年版に見い出せる。これには《Peabody, Frederick W. lawyer, 2 Kilby, rm 12, tel. res. 26 Blagden》とあり、ボストンのキルビー街二番地十二号室(旧州庁舎間近の市街一等地・現在は駐車場)に事務所が、ブラグデン街二十六番地(市中心部の高級住宅地バック・ベイ地区)に自宅があったと考えられる。有島がピーボディーの子供達を送り届けた別居中の夫人の

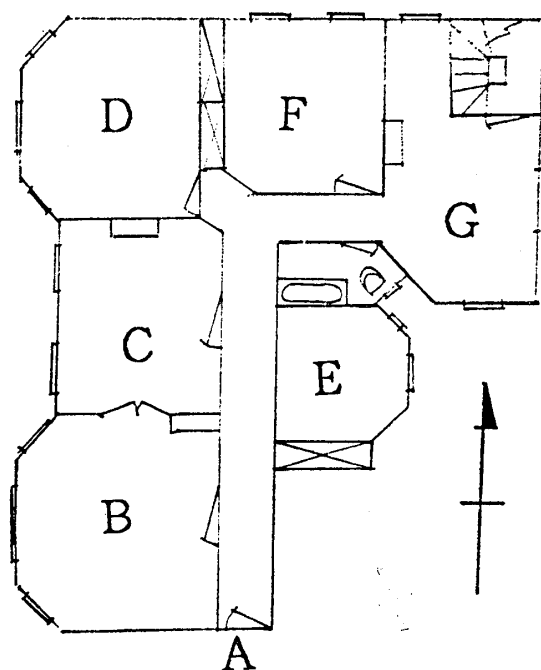
住居『迷路』の印象的な舞台のモデルか)であった可能性も推測できる。——とすれば、我々は、『迷路』世界の背後にあった現実が、典型的なWASP(ホワイト・アングロ・サクソン・プロテスタント)社会とされるニュー・イングランドの中でも、特に、(分厚い白人世界の壁が最もよく見える)真っ只中でのドラマだったことを、今まで以上に鮮明に思い浮かべる事が可能であろう。

※ピーボディーがケンブリッジを去った後、どこに移ったかは、未調査である。が、ボストン市の中心・ボストン・コモン脇のトレモント街十番地(10 Tremont St.)に、少なくとも事務所があった事はほぼ確かである。詳しくは、後掲の年譜中に述べる。

さて、このアパート「ザ・グリーンエーカー」の内部を、現在の居住者の好意で見ることができたので、ピーボディーや有島の、当時の生活舞台をある程度推測することができるようになった。

むろん、アパート内部が改造されていることは大いに有り得るし、どの部分に住んでいたかを確定する資料もないので、あくまで推定にすぎない。しかし、日本で考えられるより遙かに昔どおりの可能性が強いことも確かである。

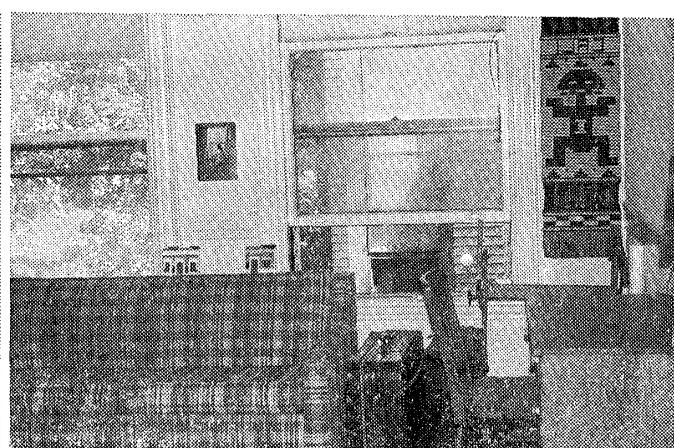
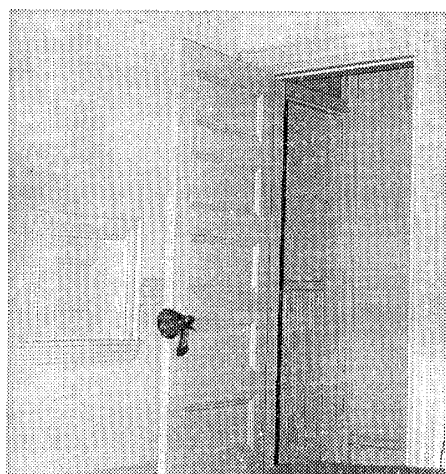
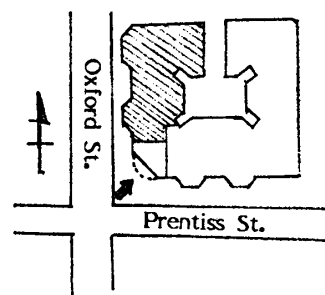
次に掲げる【図一】が、「ザ・グリーンエーカー」の平面図である。居住者にピーボディーの事を説明したところ、斜線の区画が、大きさから言って(有島と共に)彼が住んだ可能性が最も高い部分との事であった。一階から三階まで、皆同じ構造とのことである。【図二】が斜線の区画(二階)の内部である。Aが玄関、B・Cが二部屋続きのリビング、D・Eは寝室等と思われ、Gは台所、その隣のFが、ちょうど有島の日記にある「二間四方」ほどの「北向き



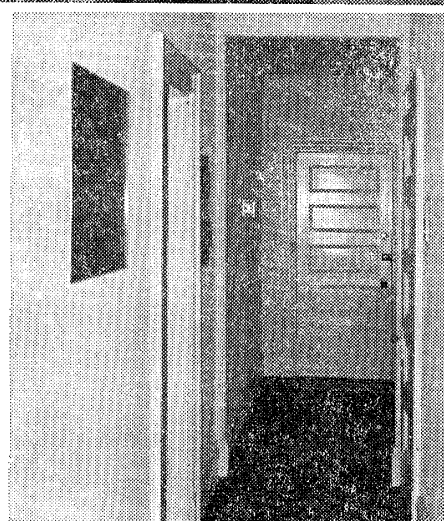
左〔図二〕

下〔図一〕

Prentiss St. は、当時 Harris (Marris?) St. と呼ばれた。Oxford St. を約一キロ南下するとハーバード大学中心部。十三頁の写真Aは矢印(玄関)方向から。



上右・F室内部。
内部の写真
上左・同右、入口。



下右・F室前より
玄関Aを。

下左・台所G

の「部屋で、有鳥がいた可能性を思わせる部屋であった(Dの可能性もあるが)。「迷路」では「古めかしい木造の平家」になっているが、どこか通う所もあろう。内部の写真も掲げる。

六

以上の諸点を整理しつつ、現在可能な限りでの《略年譜》作成を試みたい。記載事項の出典は、前掲《Who Was Who》によるものは※印、その他は、必要な限りそのつど記す事とする。()内は年令。

《ピーボディー略年譜》

| | |
|-----------------|--|
| 一八六二 (0) | 六月六日、Enoch Wood Peabody, Cornelia Peabodyの間に、ブルックリンで生まれる※。 |
| 一八八八 (25~26) | ブルックリンの Polytechnic and Collegiate Inst. (未詳) 及びコロンビア大学を経て、同大学ロウ・スクールより「優等で」法学士号を得る※。同年、ニューヨーク裁判所所属弁護士資格を得て、同市の Peabody, Baker & Peabody 事務所の一員となる※。 |
| 一八九三 (30~31) | 九月二日、Anna G. May と結婚。後に Mary May, Helen の二女子をもうける※。(子供の名前も有鳥日記と合致する) |
| 一九〇一 (38~39) | ボストンでキリスト教科学を批判する講演をし、著書(一)の初版を発行した(但し、著作権表示は一九〇四年)。 |

(※には記載が無いが) 前項から、一九〇一年には、既にボストン

に移っていた可能性が高い。なお『迷路』のPは、「紐育州の離婚手続は面倒」だから「移籍後三年で離婚」出来る「マサチューセッツ州に移つて来た」とされるが、これがある程度までピーボディーについての事実だったとすれば、ボストンへの移転はそれほど昔の事でもなからう。いずれにせよ、遅くとも一九〇四年までにはボストンの 26 Blagden St. に移転し、同 2 Kilby St. に事務所を開いている。さらに、著書(一)には、of the Boston Bar とあり、弁護士としての所属がわかる(但し、確認したのは一九〇六年の第三版)。なお、カリフォルニア裁判所(?)にも所属していた可能性もあるが、未確認。

一九〇四
(41~42)

翌一九〇五年版ケンブリッジ市住所録に記載があるの
で、この年には(妻子と別居し)、同市の 124 Oxford St. に住み始めている。また、遅くともこの年末ごろまでに、ハーバード在学中の日本人社会主義者・金子喜一を知っていたはず。

一九〇五
(42~43)

一月六日(金曜・大雪の朝)、ハーバード在学中の有
鳥武郎が、訪ねて来る。朝食・夕食の用意をさせるかわ
りに家賃・食料は免除するという約束をする(前日の夜、
訪問予定があったらしい)。一月十日(火曜・晴れ)有鳥
武郎入居。これより、彼との「共同生活」が、半年ほど
続く(有鳥は同年六月十二日に、ボストンより、ニュー
ハンプシャーに発っているの、最大、その時点まで)。
著書(一)、第三版刊行。この年の、ケンブリッジ市住所
録には、記載が無いので、前年中に、どこかへ転出して
いる事がわかる。著書(一)の扉には、"Copies of this
pamphlet may be procured of the author, No. 10
Tremont St., Boston, Mass." とあり、10 Tremont
St. に事務所があったか、あるいは、有鳥との「共同生

一九〇六
(43~44)

活」後、ここに引越したかの可能性がある。

一九一〇 三月一七日、ハリファックス（ノヴァスコシア）の
(47~48) Frances R. Bliss と再婚。Richard, Alexander の二

男子をもうける※。著書(二)初版刊行。なお、「キリスト
教科学」の創始者エディ夫人に対し、彼女の息子達がお
こした訴訟の弁護士をした※とあるが、同夫人はこの年
死去している。

一九一二 職を退く。

(49~50) 著書(二)再版。

一九二六 著書(三)刊行。少なくともこの年まで、キリスト教科学
(63~64) 批判の活動が続いている。著書(四)刊行。遅くともこの年
までには、旧連合国に対する戦債問題についてのアメリ

カ政府批判を始めている。

一九二七 著書(五)及び著書(六)刊行。この発行所が、マサチューセ
(64~65) ツのアシュバーナム (Ashburnham) になっているの
で、遅くともこれまでは同地に移って永住したと考え
られる。

《Amerian Association Favoring Reconsideration
of the War Debts》を創設し、その指導者となる※。

一九二八 著書(七)刊行。

一九三八 八月一五日没（七六歳）。（前掲カナダ版著述家事典）

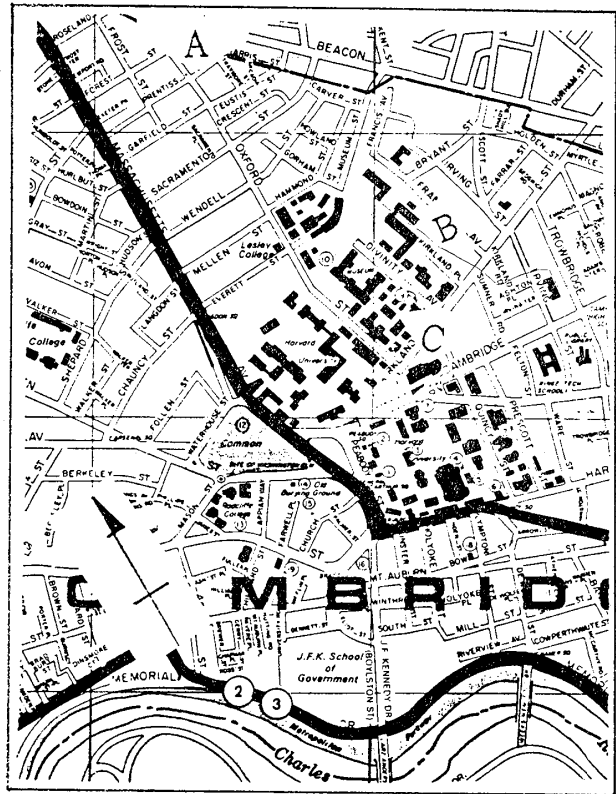
七

有島武郎のハーバード時代は、陰鬱な気配に満ちている。キリス
ト教入信以来、ペンシルヴァニアのハヴァフォード大学時代まで、

有島の内部に確実に存在していた一種の sun-clear な世界像（そ
れは、「日本民族の天職」追及という思念に、集約的に表現される
が）は、崩壊してしまった。この崩壊を象徴するものは、フレンド
精神病院で有島が看護していたスコット博士の自殺だが、有島がそ
れを知ったのは、ハーバード入学のためボストンへと向かう汽車の
中での事であった。——ハーバード時代は、いわば、「崩壊」とと
もに始まったのである。しかもその危機は、日露戦争終末期、極東
の地で凄惨な戦闘が続き、アメリカでの大報道が有島を包んでいた
時期でもあった。

有島は、その危機の中で、反国家的な「彼ノ激烈ナル観念」（日
記・一月八日）を抱き始めるのだ。そして、彼がピーボディーに出
会ったのは、まさに、その瞬間においてであった。「弁護士ピーボ
ディーとは何者か」という問いの重さは、この事にかかっている。

筆者が本稿において、些かなりとも明らかにしようとしたのは、
「戦闘的ヒューマニスト」としての実質を備えたピーボディーの、
個性的な人間像の輪郭であった。例えば有島と「共同生活」をして
いたころ、一方で離婚を準備していた彼は、「キリスト教科学」と
の闘争のまっ最中だったのである。その「放埒な、然し美しい霊
魂」（有島・前掲書）に迫ることは今後の課題であるが、ホイット
マン紹介者としての「補助的」役割のみならず、むしろある意味で
はホイットマンを引き連れた形で、「弁護士ピーボディー」は、有
島在米時代の精神世界に登場し得るであろう。



ケンブリッジ中心部(現在) 地図

Aはヒーボデーのアパート「ザ・グリーンエーカー」、Bは有島がここに住む前にいた、12 Kirkland Pl. の家。中央部の黒塗りの群は、ハーバード大学の建築群で、C直下がメモリアル・ホール。下方はボストンとの境界・チャールス川。(地図中、二本の太線は、現在の幹線道路。)

註

- 1・2 鈴木鎮平『有島武郎におけるホイットマンの相貌』明治書院、昭和57。なお、有島とホイットマンの「出会い」はこれ以前にもある。
- 3 森山重雄「有島武郎における生の二律性認識」『実行と芸術』増書房、昭和44。
- 4 W. Stewart Wallace, *A Dictionary of North American Authors Deceased Before 1950* (Toronto, Canada: The Ryerson Press, 1951),

P. 348.

- 5 *Who Was Who in America—A Companion Volume to Who's Who in America*, Vol. 1, 1897-1942 (Chicago: The A. N. Marquis Company, 1943) P. 947
 - 6 『日本大百科事典』小学館、昭和47。
 - 7 生駒孝彰『アメリカ生れのキリスト教』旺史社、昭和56。
 - 8 『カトリック大辞典』富山房、昭和29。
 - 9 7に同じ。
 - 10 有島武郎『リビングストン伝・第四版序言』
 - 11 *Dictionary of American History*, Revised Edition, Vol. 7. (New York: Charles Scribner's Sons, 1976) P. 331.
 - 12 早坂忠「戦勝国の内政と外交」(岩波講座『世界歴史』二六巻) 昭和45。
 - 13 Wildon Lloyd, *The European War Debts and Their Settlement* (New York: Committee for the Consideration of Inter-Governmental Debts, 1934) P. 16, 30.
 - 14 *Cambridge Directory* (Boston: W. A. Greenough & Co., 1904~6)
 - 15 *City Directory of Boston* (Boston: Seaver-Radford Co., 1904)
- 一九八五年度海外留学者として、研究調査の機会を下さった、前任校・津曲学園鹿兒島短期大学に感謝申し上げます。また、小玉晃一氏・植栗彌氏はじめ御教示戴いた諸先生、ハーバード大学のロバート・キャンベル氏に感謝申し上げます。

くりた ひろみ (国文学)